夷實弓張月

前編

貳

へ13
3692
2

門 へ13
號 3692
卷 2

曲亭翁原稿 西馬老人綴

東京書房 文昇堂熊谷梓

仏経の如是我聞小説乃詰解むつかしくめさとドハ四国と廻る猿蟹の
出しゝ残りと仰せ御時今ハ昔枕も其後去程にを挿史什数語の紋切形ふ
て劇場の鳥ハ時世く此末ハどうなの後もいつ形る趣向と見ぬ先ハ不知でりゝさ
根ゝ楽屋紙あるゝ人人藝仕掛と見まる千品の種本省宮ハ皆ふ
ゝ当横のゝひと営業ハ書量費ぬゝぬ望僕等が二百三孔の漬込
茄子より噛ちゝと味のゝる古潭庵乃功の者書やくと催促に華ハ庵ハ机の
俎刻んで出ハ初編二編夜長の茶づけハ口ふ合ハ暫ゝ好嗜乃三倍目
給仕の盆ハ弓張月横と雁の文字と並べ明方の口繪ハ半張まゝ覧
きゝゝね寝言の演條其ハゝ自湯

嘉永三庚戌初夏稿成
仝四歳辛亥孟春糞市

樂亭西馬題

阿曽二郎
忠国
為朝の
室
白縫姫

地驚劔影
便逃死
馬惡衣香
欲噛人
心納言入道
信西
六條判官源為義

源八郎冠者
朝烏

比良嶽山中
楊梅瀧變化
烏義馬飼
呑市

関白
源為義

判官爲義

四郎頼賢

七郎爲成

六郎爲宗

九郎爲仲

八郎爲朝

五郎頼仲

源八郎冠者爲朝

八町礫紀平次大夫

八代

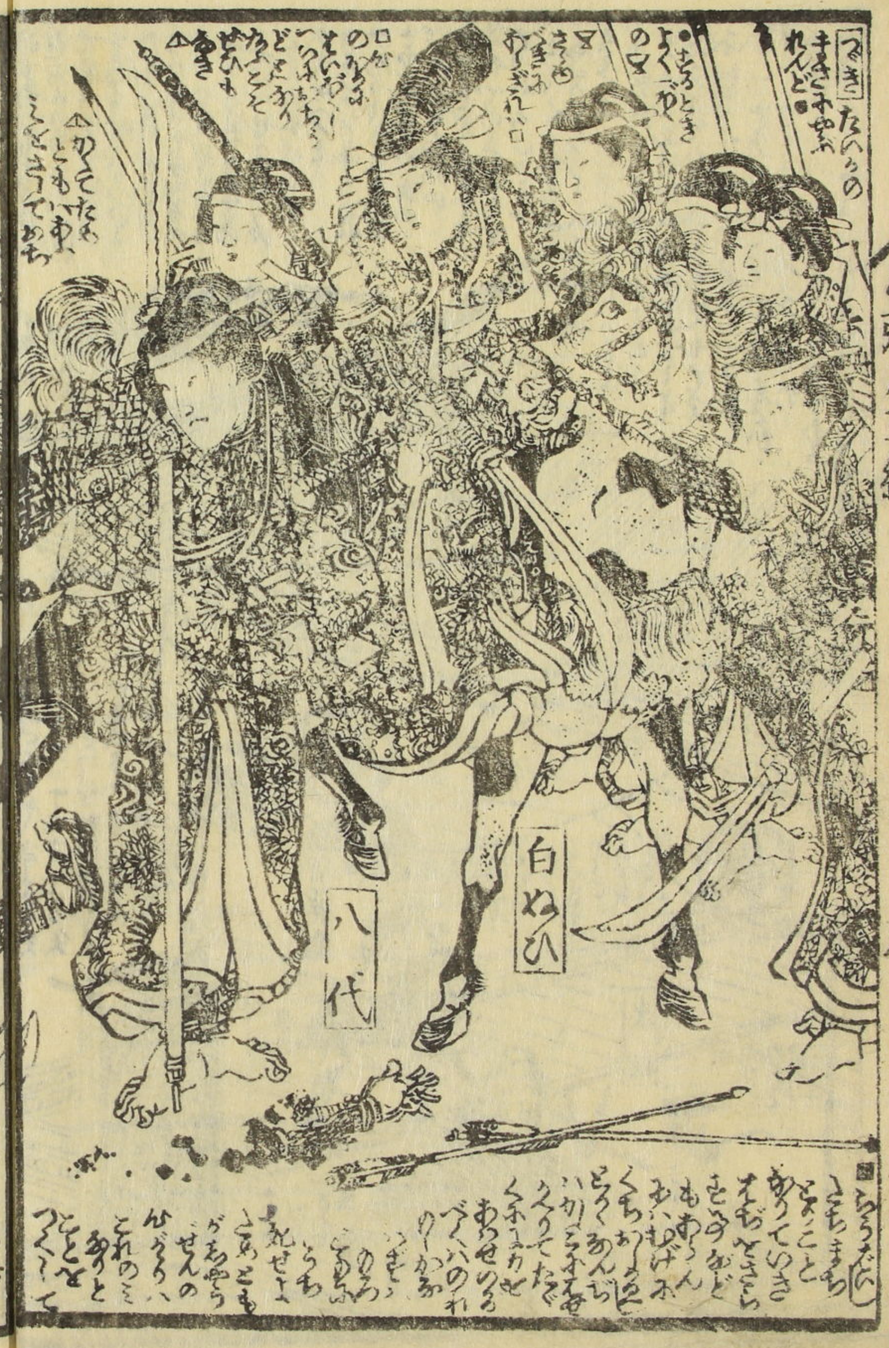
阿曽忠国

吉田兵衛

白ぬひ

高間四郎

高岡四郎
吉田兵衛
忠国


八代
白ぬひ

野風

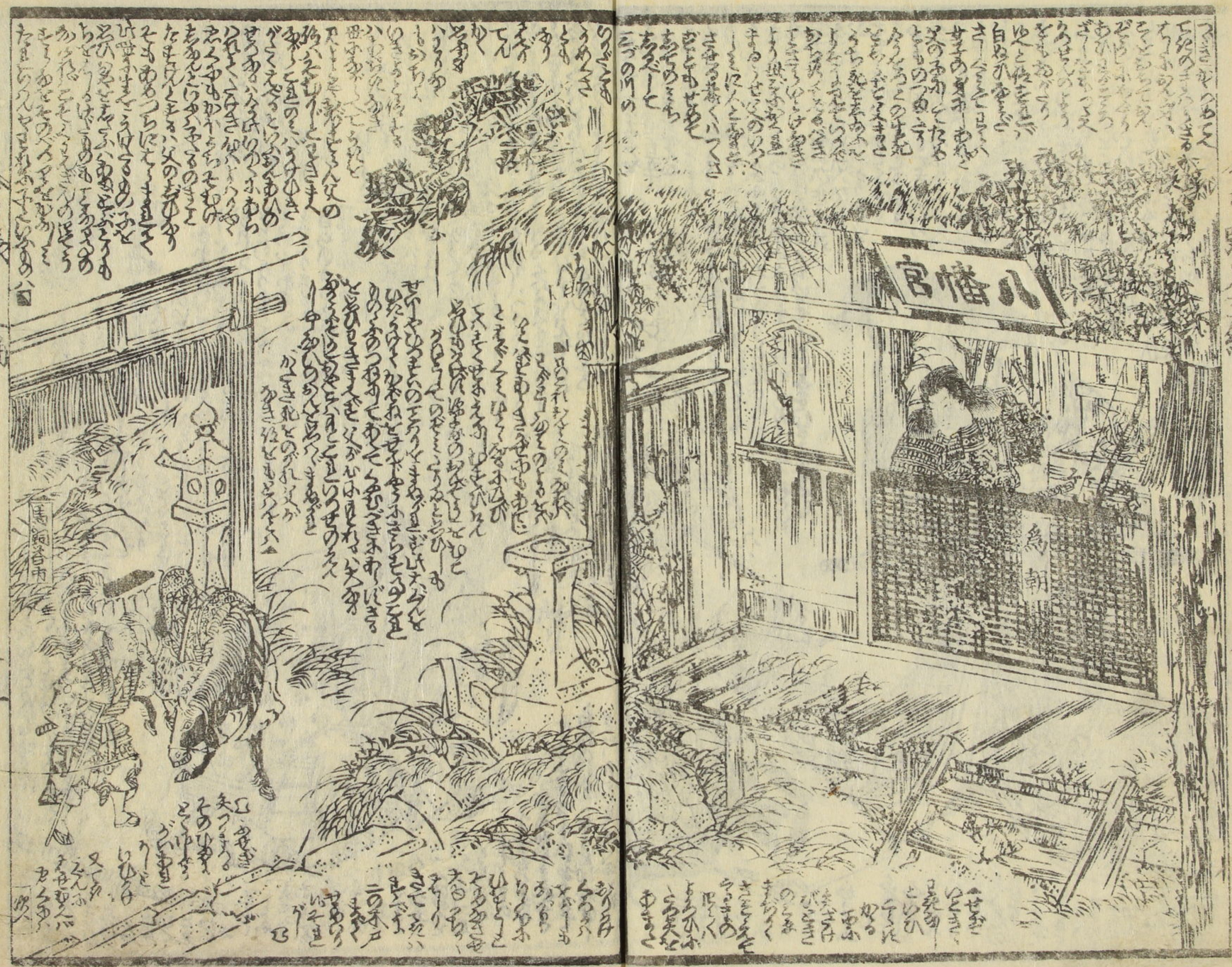
八代

白ねひ

國輝画 西馬摸譯

八町礫紀平次

白縫姫


八幡宮
烏朝

昆良の安幸の図
谷市
八郎爲朝

八郎爲朝

谷市

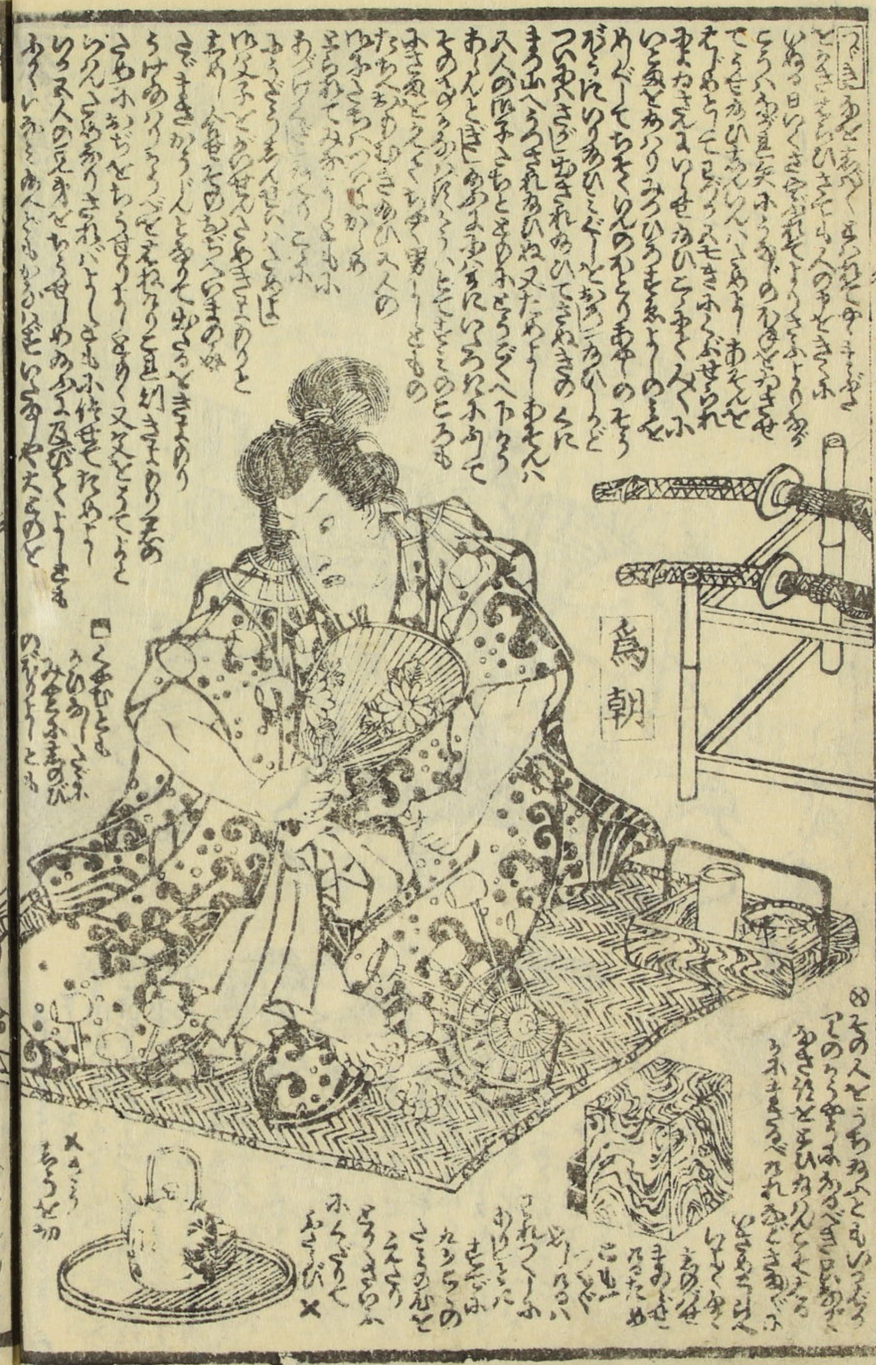
為朝

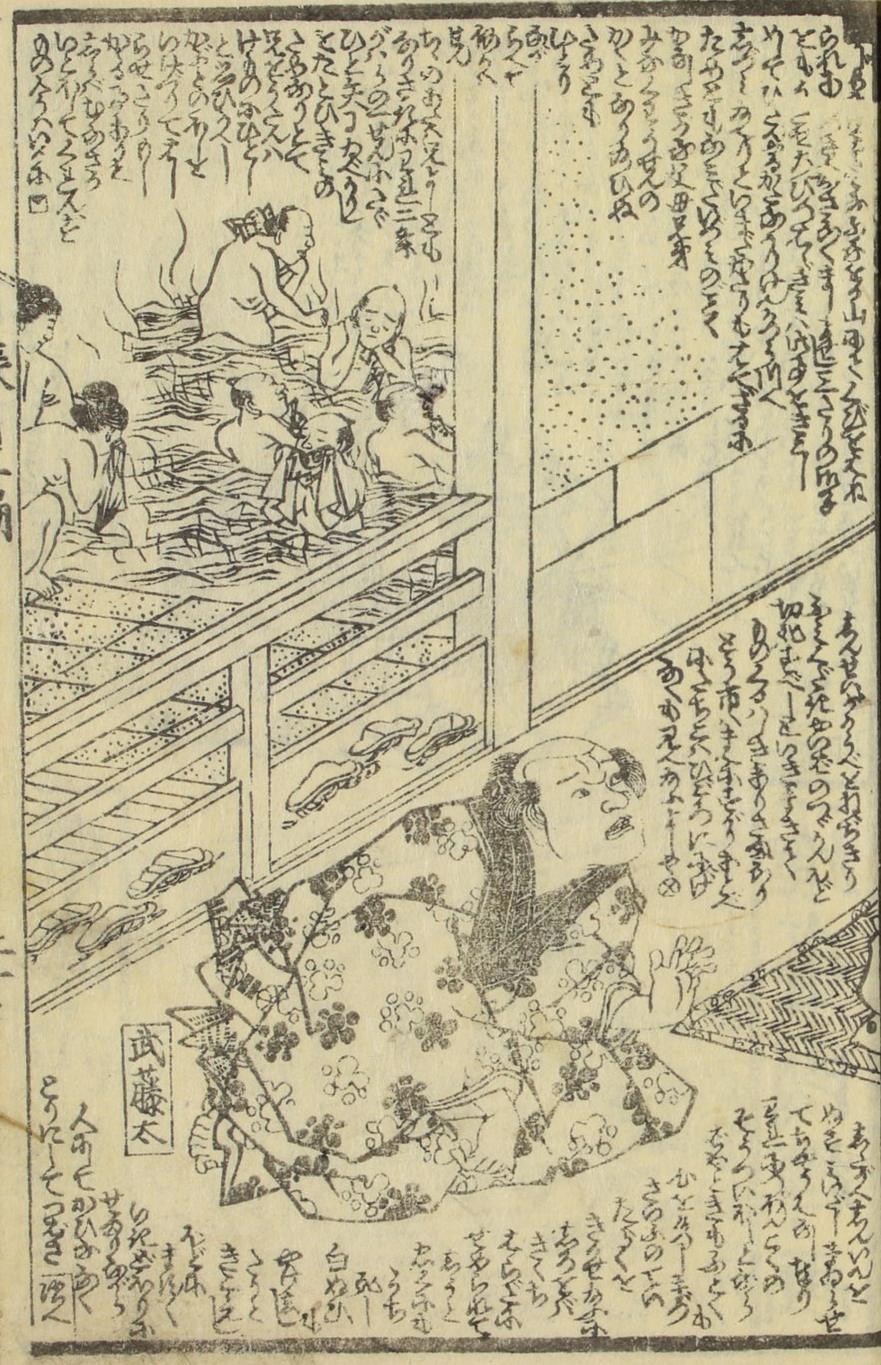
為朝

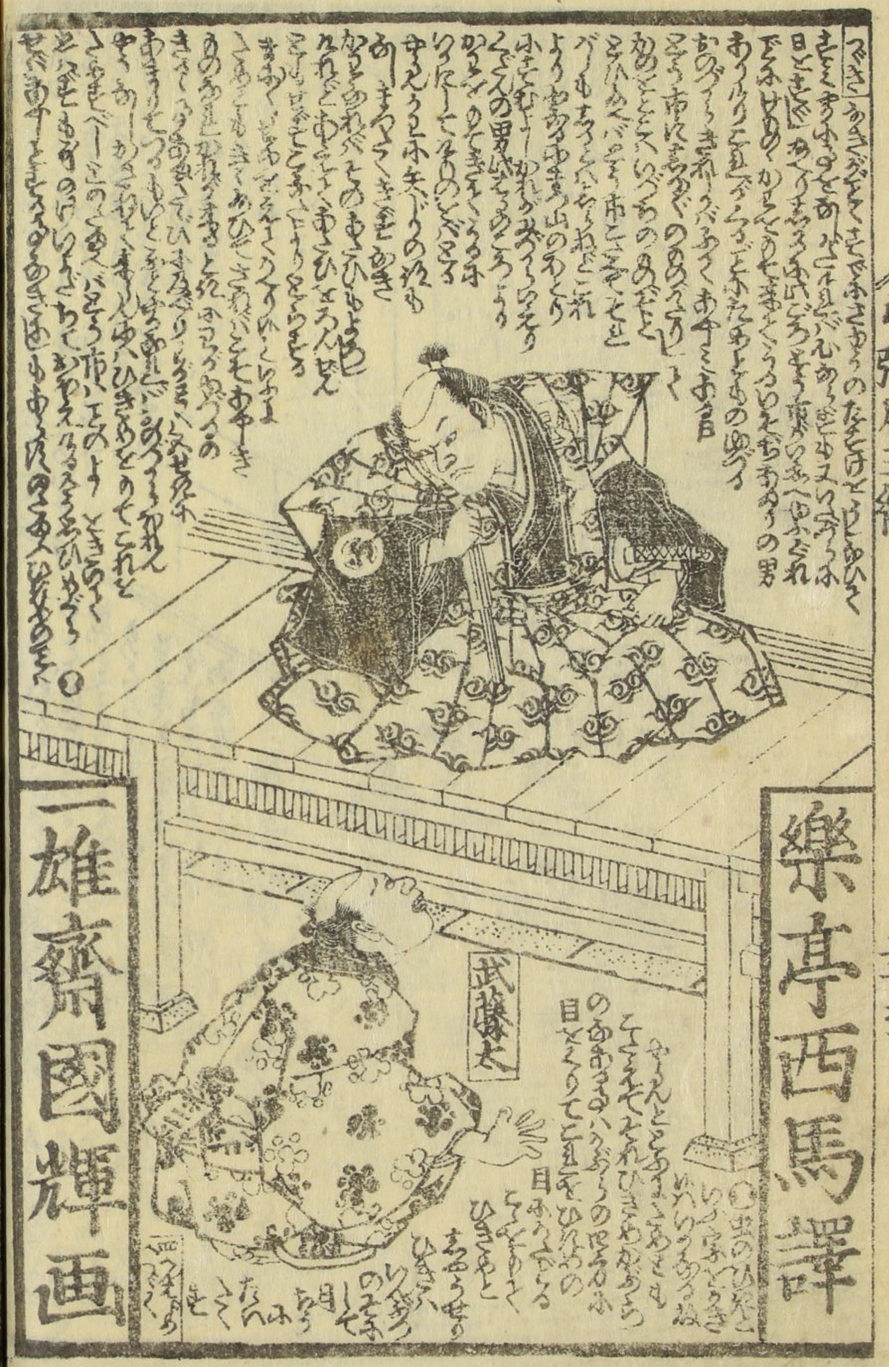
烏朝
岩市

八郎爲朝
谷市

武藤太


烏朝


武藤太



四編壹

故式亭先生八金龍山麓の産也實父菊池茂兵衛翁（法名喜樂）八文嶋の産かり壮年の頃
東都小菜ヶ[illegible]郎工と業とし其生長壽にして小三馬
の許ゆく後と共に六衛翁彼島八郎大明神に社務菊池何某ふ内縁ありて時々書通音
信に及ひ然るに此秋僕本町庵へ往さりふ折節珍客ありて主と談話も拙側にありて
聞ふ八丈の祠官ゆくゆく及び爲朝大明神の開扉とん人迎出府のまて議ゆ程なく
免許の札と建来て春両国向ゆ開帳せ[illegible]ゆ文化丙子深川富岡ゆ開扉ありしハ
最三十五年乃往昔とありしゆ神八信あるとのそ成就まもなく三歳の童蒙も崇尊せ[illegible]
源家古今の英勇神その參詣の群集せ筆と爰ゆ祝ひ将先哲妙作ゆ弓張月
の當ゆ[illegible]八今發行の稗史弓張月も旧年八三四の巻迄筆と出来次の早春
五六七編と弥生の頃迄續く出板あ[illegible]賽路の御土産物ゆ備へと價千金ゆ春の霄
榮四方の霞乃引もきゆ賣出ゆ申候

嘉永四年辛亥初春

樂亭西馬誌

鬼王新藏彰江
野の鳴の二郎の長女
大島郡司三郎大夫忠重

御曹子八郎爲朝

八町礫紀平治大夫
悪徒武藤太
唱侍女
唱侍女

待野八郎
工藤茂光
白縫姫
平士紋九

八郎爲朝

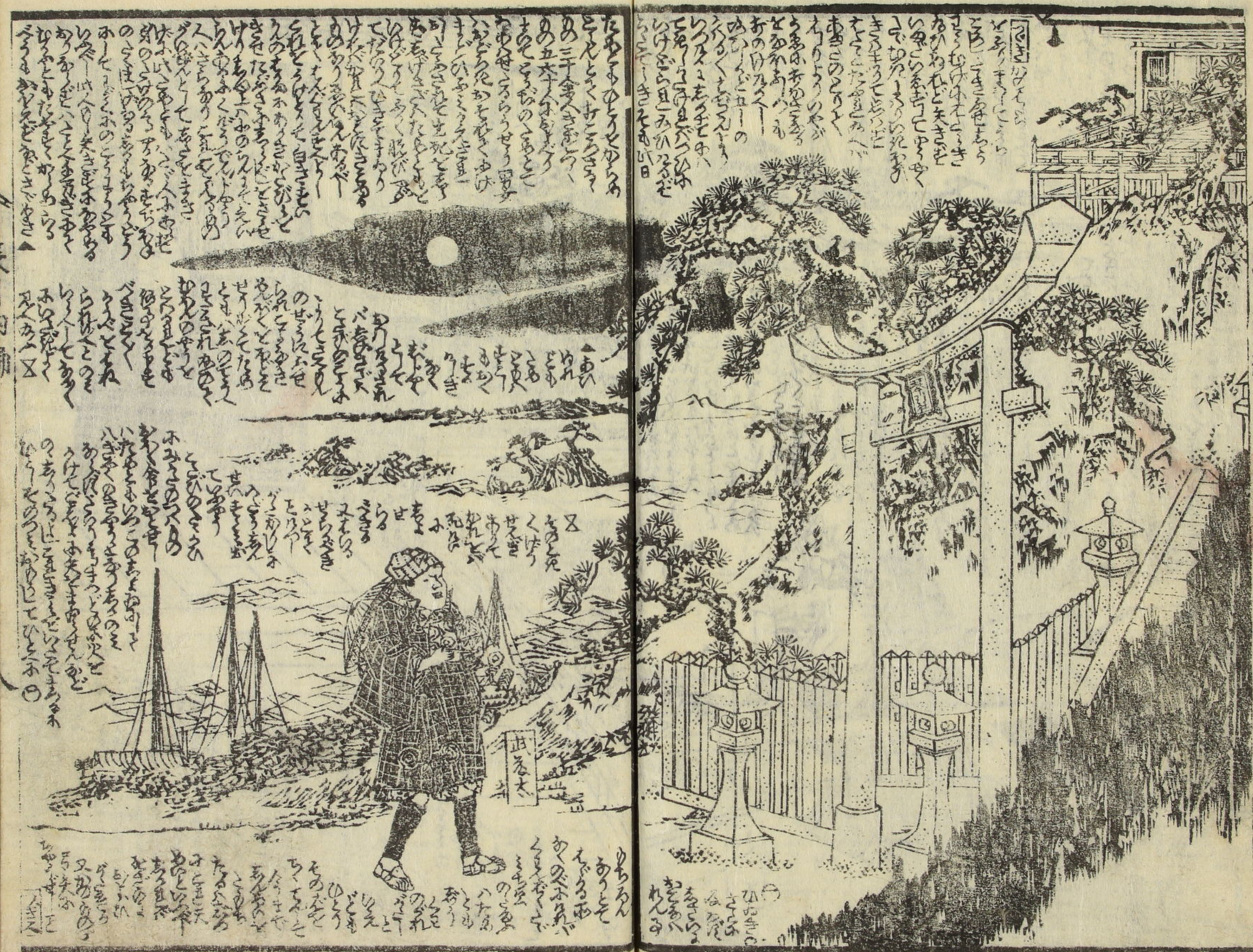
八道信西
佐土重貞
武藤太

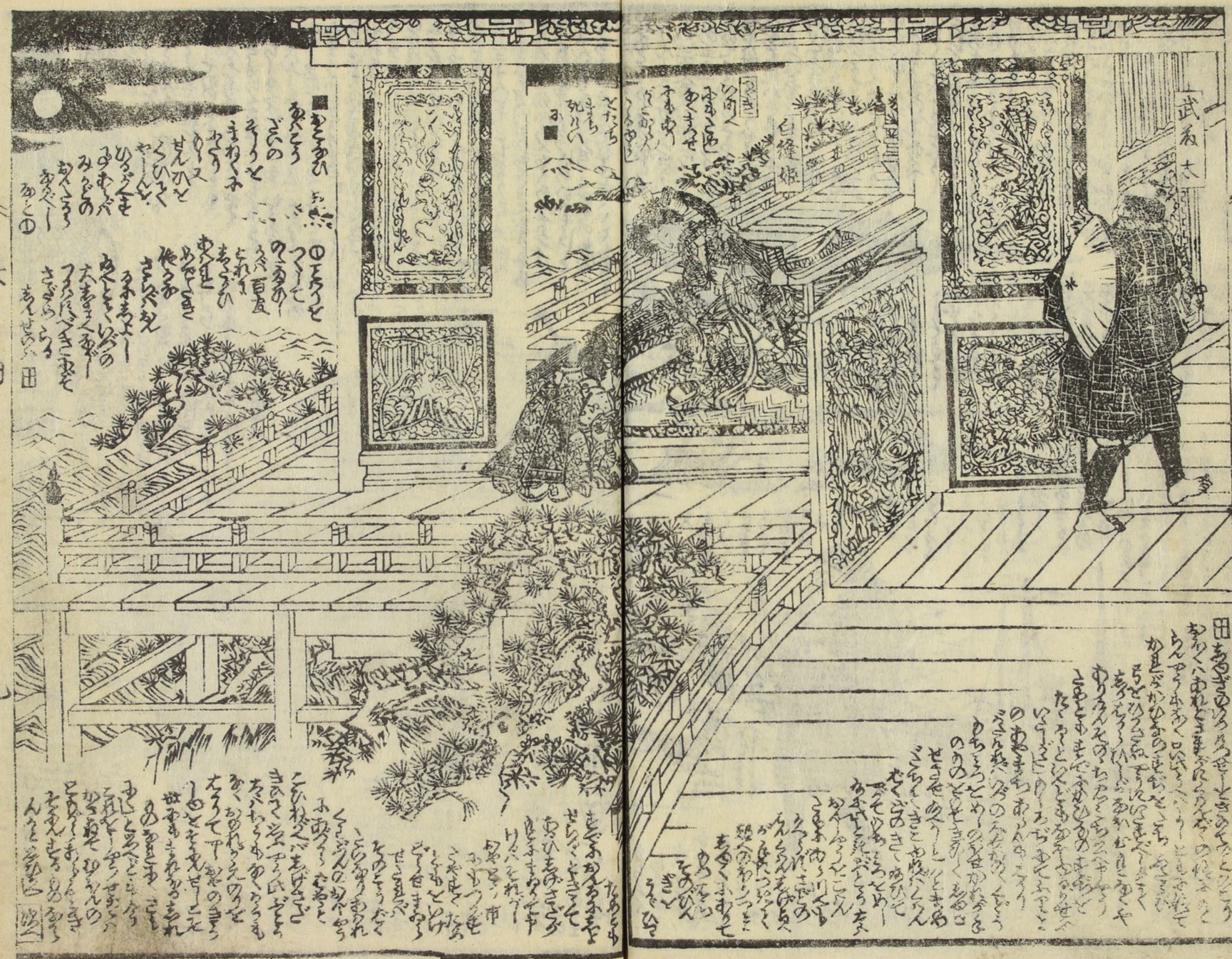
佐土重貞

武藤太

武藤太

丈五
丈六

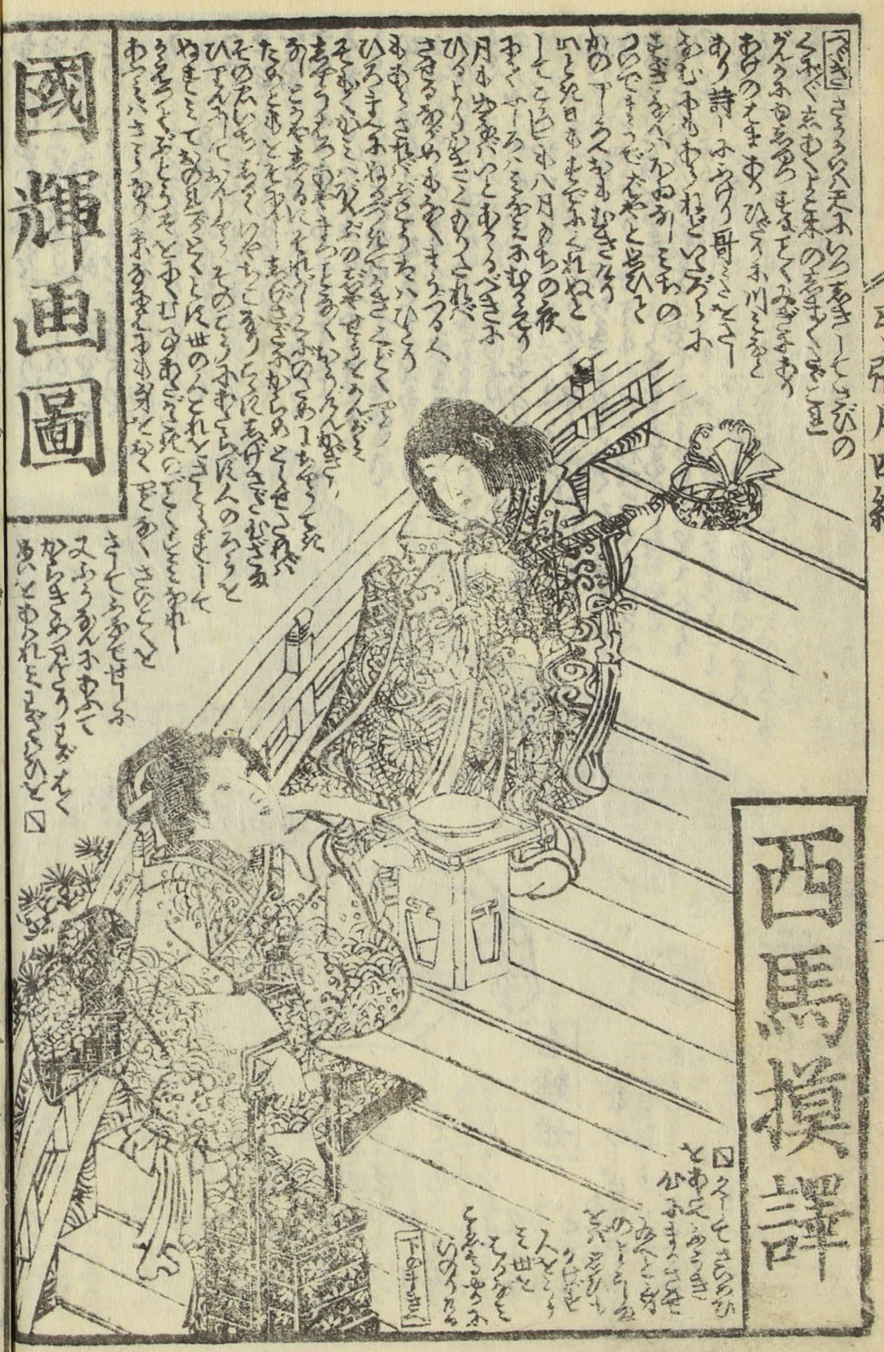



武蔵太
白縫姫

武藤太
白縫姫

國輝画圖

西馬模譜

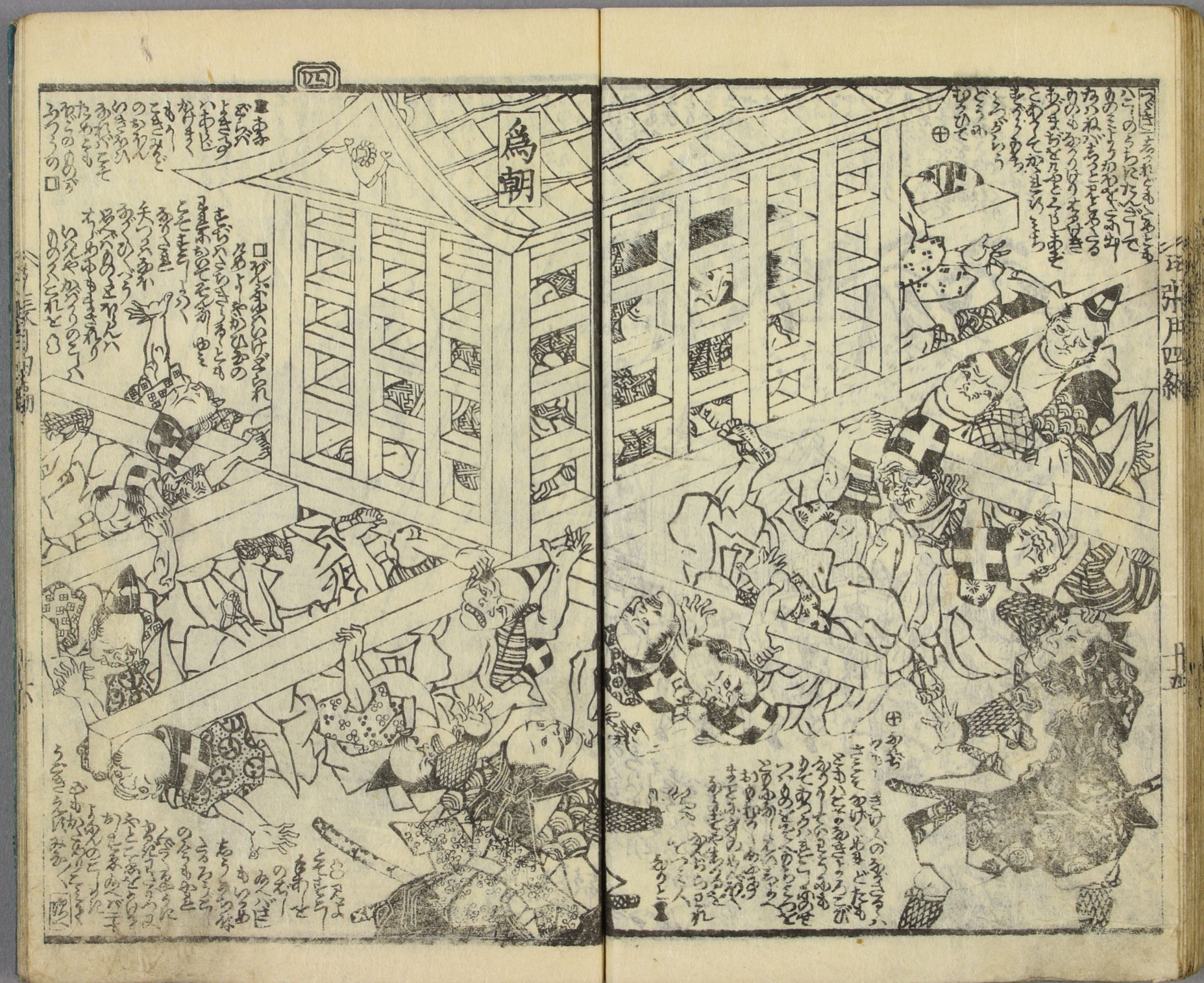


武義太

白縫姫
武藤太

武義大

白浪八雄


四
爲朝

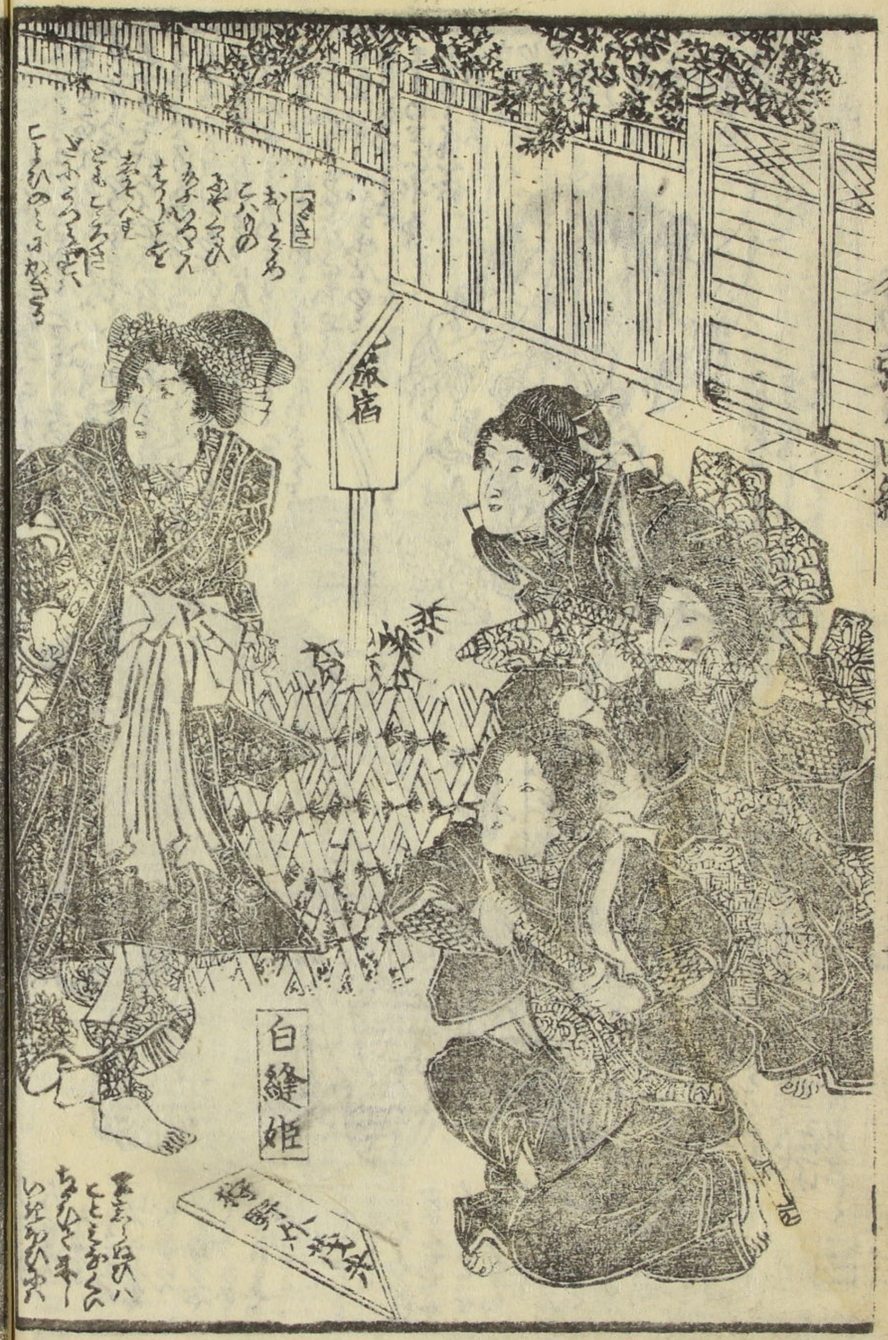
白縫ゞ侍女
紀平次
白妙姫
八幾光藏宿

紀平次

白縫姫

白ぬひ
武蔵左ぶ人ぶ

紀平次


藤宿
白縫姫

八町礫紀平次

樂亭西馬模譯
一雄齋國輝画